

井伏鱒二における＜悪意＞の問題ー『山椒魚』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000150

【論文】

井伏鱒二における＜悪意＞の問題—『山椒魚』を中心に

秦野 一宏

1.

大正12年の『幽閉』（『世紀』7月号）に登場する山椒魚は悪党ではない。『幽閉』は後に手を加えられ、昭和4年には『山椒魚—童話—』という題名で『文芸都市』（5月号）に発表、翌年には副題ぬきの『山椒魚』という標題で作品集『夜ふけと梅の花』に収録された。『山椒魚』（あるいは『山椒魚—童話—』¹⁾）の山椒魚は、『幽閉』の山椒魚とは違い、岩屋に閉じ込められているうちに、「よくない性質」、すなわち＜悪意＞をもつようになる。彼は、自分が閉じ込められている岩屋に蛙を閉じ込める。

この山椒魚の「よくない性質」に関して、たとえば関良一は次のように指摘した。「自己を詩人＝哲学者風に美化せず、かえって一個の憐れな俗物、憎むべき悪漢として客観し、貶め、その底に一脈の善意を発見することによって、この作者は、その長い無名時代に終止符を打つに足りる「山椒魚」を獲た²⁾」。自己美化の有無に触れている点は興味ぶかいのだが、ただ多くの論と同じく、関論文でも、悪意の問題は井伏鱒二という作家の個人史の枠を超えて論じられることはない。また仮に、「悪党」になった山椒魚を作者個人に重ね合わせたとしても、悪党にも「一脈の善意」があったなどと作者が「発見」したと言えるのかどうか。もししたとすれば、それこそそれは、自己を美化する「発見」となってしまうのではないだろうか。

東郷克美もまたさらくとはあるが、山椒魚の＜悪意＞に触れている。東郷によれば、『幽閉』の山椒魚（Aと表記する）は、『山椒魚』の山椒魚（Bと表記する）のように「発狂しそうになるまで深く絶望したり、他者に対して「呪い」や悪意を抱くようになったりすることはない³⁾」。東郷が強調するのは山椒魚Bの絶望の深さであり、BにはAにない内面的な屈折

2-井伏鱒二における＜悪意＞の問題—『山椒魚』を中心に

があるということだ。Bに屈折があることはおそらく間違いはないが、内面的屈折が悪意を生むというだけでは、漠然としていて悪意の意味するところが見えてこない。いったい屈折とはいかなる屈折なのだろうか。

東郷の言う「屈折」に代わるものとして、佐藤嗣男は「疎外」という言葉を用いる。「『山椒魚』では」被害者が加害者に転じる。そうして本当の敵＝疎外の根源を見失って自分より弱い者を徹底的にいじめ⁴⁾。「本当の敵」とは何なのか、また、どうして山椒魚が「被害者」ということになるのか。チェーホフの『6号室』のように、暴力で人を閉じ込める病院の施設が問題であれば、閉じこめるように指示した加害者は誰か、あるいは、閉じ込めている病院の存続を黙認している者は誰かなどと、責任を負うべき者や、それこそ根源的な原因を問うこともできなくはないが、『山椒魚』の岩屋は違う。山椒魚はただ岩屋から出られなくなったことで、悲歎にだけである。楽長から叱責されたことが猫やかっこうへのいじめを誘発するゴーシュ（『セロ弾きのゴーシュ』）の例のように、間接的な原因があるわけでもない⁵⁾。山椒魚が岩屋から出られなくなったのは、どこまでも自分の招いた災厄で、そこには＜被害＞などというものはない。実際に被害を受けるのは蛙のほうだ。ところが佐藤によれば、れっきとした被害者であるこの蛙は、「山椒魚の中に醸成されていた悪党性を発見するための＜狂言廻し＞でしかない」ということになる⁶⁾。どうしてそんな奇妙なことになるのか。力によって閉じ込められ、「徹底的にいじめ」られた蛙は、それこそ、山椒魚と同等の重みをもつ重要な＜登場人物＞ではないか。蛙とは何か、蛙の役割は何なのか、そもそもなぜ山椒魚の中に＜悪党性＞が醸成されなければならなかったのか、そこのところが問われなければならない。

問題の焦点はなにより、山椒魚の自意識とその扱い方にある。山椒魚Aからはたしかに、「詩人＝哲学者風に美化」した井伏の顔、自分を過剰に意識した井伏自身の顔が透けて見える。Bでも自意識家の＜面^{つら}＞が前面に出ているが、その頓馬な面はもう作者本人のものではない。なにより面白いのは、自意識家のBには、とぼけ顔の＜作者＞が解説者として付くようになることだ。＜作者＞はあるがままの出来事を冷静に、客観的に伝えるわ

けではない。「すでに彼が飽きるほど闇黒の浴槽につかりすぎて、最早がまんならないのであるのを、了解してやらなければならない。(…) いかなる瘋癲病者も、自分の幽閉されてゐる部屋から解放してほしいと絶えず願つてゐるではないか⁷⁾」。「どうか諸君にお願いがある。山椒魚がかゝる常識に没頭することを軽蔑したりルンペンだと言はないでいたゞきたい」等々。こうした山椒魚を擁護するような言葉は、山椒魚の味う不安、悲しみを山椒魚になりかわって読者に伝えると同時に、山椒魚に降りかかってきた出来事を、誰もが了解しうるもの、一般的な素材に変えてしまう。こうして、蛙を閉じ込めるという山椒魚の非道な行為でさえ、幽閉の憂き目に遭った者なら誰でもなしうる行為として一般化されることになる。

宇野浩二の作品を評した井伏の言葉を援用すれば⁸⁾、『山椒魚』の作者は「物語に没頭するかの如く記述してゆきながら、しかも巧妙に素材を突き離してゐる」。同じことが、『山椒魚』が書かれた昭和4年前後の物語の「私」と作者の関係についても言えるだろう。井伏の使う「私」は、私小説に登場するような作者とイコールの〈私〉ではない。井伏の「私」は山椒魚Bと同じく、作家個人を超え、もっと広く、近代の「知」におぼれた人間、明治・大正期に移入された〈西洋近代〉の知を鵜呑みにしてきた〈知識人〉として一般化されている。

山椒魚Aと山椒魚Bの差をもう少し具体的に見てゆこう。たとえば『幽閉』には、山椒魚の思いを述べたこんな一節がある。

「目高達は何の理由で、間違つてよろめいて出た奴の後をばかりお手本にするんだ。／彼は—山椒魚は恰かも目高達よりは一步悟入してゐるつもりで苦々しく呟いた⁹⁾」。

この山椒魚Aは自分は悟りにはいつているので、無明の目高たちは違うというのだ(『幽閉』では『山椒魚』にはない「三千世界」「流転」といった仏語が使われているのは特徴的である)。Aは考える。この出られなくなった岩屋でも、「悠暢な、何者にも攪拌されない生活」を続けて行くことが出来るのだとすると、ここでの生活もまんざら棄てたものでもないらしい。

4-井伏鱒二における＜悪意＞の問題—『山椒魚』を中心に

「第一我々の生活は、わざわざ岩屋から出て行つて暮すほどの価値あるものであらうか」、等々。このような考えはしかしながら、「慰めになる道理はなかつた」。慰めにはならないと分かっているが、それでも A はひたすら考え続ける。「一露の玉や、苔の実や黴は、今僕に何んな関係があるか、またそれ等は僕に何を暗示しやうとしてゐるのであるか？」と。

『幽閉』のテーマは、考えるという＜魔＞に取りつかれた者の孤独と倦怠である。昭和 2 年に書かれた『埋憂記』では、「私」の友人である在竹がこんな風に言う。「考へるなどといふことは何もしないといふことと同じことだ。けれどえたいのしれない魔物が僕を考へ込ましてしまつたのだ。ばく^{ばく}に読書をさしたのだ。その結果、僕はただ思ひぞ屈したのである」。—この「えたいのしれない魔物」に取りつかれ、仲間とも疎遠になった者の「倦怠」を、閉じ込められた山椒魚の姿を借りてグロテスクに形象化したものが『幽閉』である。岩屋から出られないと知つた山椒魚は、行き詰まりの局面を打開するために悟りを開こうと、考えに考えるが、うまくいかない。いくら考えても、「考へること」だけでは救いは来ない。どんなに観念を操作しようとも、現実の孤独からは抜け出せない。結局、何の解決も見いだせぬまま、「何だか寒いほど淋しいぢやないか？」という孤独な心中を表白する山椒魚の言葉で、『幽閉』は締め括られる。

『うちあはせ』は大正 14 年に書かれた小説だが、ここでもまた幽閉がテーマとなっている。ここでの「私」は、幽居する生まれつきの盲目の男（支那の貴公子）と彼を教育してきた老人（偉い学者）の登場する芝居について語っているのだが、興味深いのは次のような一節があることだ。「一度幽居して以来、一步も部屋の外に出ないことに定めてゐる彼にとつては、現世の何物もが何物にも思へない関係にある彼は一種のデカダン^{デカダン}です」。この「デカダン」という言葉は昭和 5 年、作品集『夜ふけと梅の花』に収録する際には、「ニヒリスト」と改められた。この「ニヒリスト」は単に、世界を無や空であると認識する者という意味にはとどまらないだろう。実際、昭和 2 年に『桂月』に載せた「能勢と早川」では、心の中に「激しい情熱」をたたえている「陣痛時代」同人の能勢行蔵を「甚だしき『ニヒリスト』」として紹介している。幽居した人間、閉じこもった人間をフランス風にデ

カダンと言うか、ロシア風、ニーチェ流にニヒリストと言うか、—これは単なる表現の言い換えではない。「デカダン」がアンニエ（「倦怠」）のなかにたゆたい、そこに何がしかの美を感じ取っているとすれば、超越的なものの存在を否定する「ニヒリスト」はより攻撃的である。この「デカダン」と「ニヒリスト」の語感の差は『幽閉』と『山椒魚』の違いとも照応する。『幽閉』の山椒魚 A は、自分を閉じ込めた神に「なさないことをなさいます」とこぼしているだけで何も行動を起こさない。「大地震が起つて天地がひっくり反れば、僕もあの河の流れに投げ出されるだらうに」などと、能天気な空想に浸っているだけだ。山椒魚 B は違う。彼は、「いつまでも考へ込んであるほど愚かなことはない」と、二度にわたって、全身の力を込めて岩屋の出口に突進するのである。そしてどうしても出られないと分かったと、涙を流し、神を強い言葉で非難する。

「あゝ神さま！ あなたはなさないことをなさいます。たつた二年間ほど私がうつかりしてゐたのに、その罰として、生涯私をこの ^{あなぐら} 害に閉ぢ込めてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いさうです」。

自分のうっかりしたミスを神のせいにして抗議している間拔けた山椒魚の姿は、いかにも滑稽である。しかし、この山椒魚はただ滑稽なだけではない。「横暴であります」と神を難詰する大仰な言葉には、真剣味もなくはない。そこには微かながら、あがなわれることのない子どもの苦しみを盾にとつて、自分は神の世界は認めないと宣言するイワン（『カラマーゾフの兄弟』）の言葉を連想させる響きがある。シンボリックに言えば、『幽閉』から『山椒魚』へはまさにデカダンからニヒリストへの移行とも取れるのである。

『山椒魚』では、「悲歎にくれてゐるものを、いつまでもその状態に置いてくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかつた」と、長く続く「悲歎」が悪意を醸成するかのように記されているが、この悲歎は、捌け口のない強い不満によって醸成された特異なく悲歎である。実際、無関係な他人を不幸に引きずりこむような強烈な悪意は、美

6-井伏鱒二における＜悪意＞の問題―『山椒魚』を中心に

に沈潜する「デカダン」からは現れない。山椒魚 B の悪意は、イワンやラスコーリニコフにおけるような神を蔑^{なみ}する心、世界を否定する傲慢な意識と深く係わっている。

少々^なの驕りなら山椒魚 A にもなくはない。「目高^{めだか}達よりは一步悟入してゐるつもり」の A にもたしかに自己尊信の思いはあった。しかし、自分より下位に位置づけている生物に対する態度は、A と B では内容がずいぶん違う。たとえば山椒魚 B の心中を写した個所を見てみると―

「黴は何と愚かな習性を持ってゐたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行かうとする意志^{いし}はないかのやうであつた」。

『幽閉』では「毎日消えたり生へたりする」黴は苔と同じく、時とともに生まれそして時とともに消失するもので、「流転して行くもの」であり、そこに山椒魚 A は世界の無常を感じている。この流転の光景が「暗示」しているのは、突き詰めれば、彼自身も流転に無縁でないということである。A が高みに立っている気分になっているのは、黴が意識できないその流転を自分はちゃんと認識しているという思いがあるからだろう。一方、山椒魚 B はもはや、黴が「常に消えたり生えたり」することを流転と結びつけることはない。ここで新たに問題にされるのは「意志」である。B にとっては、繁殖しようとする「意志」がないから黴は愚かである。言い換えれば、彼にとって賢明な習性とは繁殖していこうとすること、すなわち、欲望の肯定にある。「欲望を満たすことを恐れるのではなく、むしろそれを増大させよ」。これは「自由」を標榜する「現代の教え」であると、ドストエフスキイはゾシマ長老に言わせている¹⁰が、山椒魚 B はまさにこの西欧伝来の「教え」の信奉者である。

この後、山椒魚 B は、蝦のことを「このみもちの虫けら同然のやつ」と嘲っている。

「この一ぴきの蝦は山椒魚を岩石だと思ひ込んでそこに卵を産みつけてゐたのに相違ない。さもないならば、何か一生懸命に物思ひに耽つてゐたの

であらう。山椒魚は得意げに言つた。／「くつたくしたり物思いに耽つたりするやつは莫迦だよ」。

『幽閉』では、山椒魚は蝦が「一生懸命物おもひに耽つてゐるやうな様子を見ると、それを一呑みに食つてしまふのも残酷らしく思はれて」、手を出さず眺めているだけである。また、「小さいこの肉片が何の物思ひに耽つてゐるのだらうと思ふと、滑稽でもある」という表現もある。「滑稽でもある」という言葉遣いには、自己尊信の思いはあつても、「得意げに」や「莫迦だよ」という山椒魚 B の言葉からにじみ出てくるような強い軽蔑心はない。総じて『幽閉』の山椒魚 A は、山椒魚 B のように、小さな生き物を軽蔑することはない。それどころか、A では、寂しさ、孤独の意識が最終的には、横腹に「泊つた」蝦に対する親愛の情を生みさえするのである。

山椒魚 B では、いくら孤独の意識に苛まれようとも、腹にくつ付いた蝦に対して親愛の情はわからない。「横つ腹にすがりついた」蝦はもはや「懐かしい友達」でも「兄弟」でもなく、ただの「莫迦」である。加えて、この「くつたくしたり物思いに耽つたりするやつは莫迦だよ」という悪口はそのまま、「くつたく」せざるをえない自身にもはね返ってくる。相手を低めることで、自分はいつそう高くなると思っていたのだろうが、自分は賢明だと意識すればするほど、知らぬ間に、彼は自分自身を行き場のない精神の袋小路に追い込むことになるのだ。固い意志をもった非凡人であることを自負するラスコーリニコフが、老婆殺害という<実験>によって自分を心揺らぐ凡人に分類せざるをえなくなってゆくように、自身の考えそのものによって B の立脚している土台は突き崩されてゆく。

山椒魚 B はさらに、「一びきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くこと」が甚だ困難な「目高達」を、「なんといふ不自由千万な奴等であらう」と「嘲笑」する。B は自身が自由を奪われた身であるにもかかわらず、自由のない奴隷として目高達を軽蔑するのである。A も「身体的自由」がないことを嘆いているが、A には B ほどの「自由」に対するこだわりはない。岩屋の外の蛙と水すましの「活動」を見て、A はわが身の「惨め」さを感じるが、それ以上のものはない。一方、B は蛙と水すましの「活

8-井伏鱒二における＜悪意＞の問題—『山椒魚』を中心に

発な活動」を見て感動し、羨望を感じ、彼らを見ないためにあえて目を閉じる。すると悲しさが忍び寄ってきて、自分は「ブリキの切屑」だという惨めな考えが湧き起こってくる。精神の衛生を保つためには、蛙たちが姿を消したと思われる段階で、目を開けるにしくはない。しかし彼はあえてそうしようとはしなかった。—「何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由とその可能とが与へられてゐただけであつたからなのだ」。自分は奴隷ではなく、どこまでも自由の徒であると信じつづけたかったのである。ちっぽけな動物と楽しく交わるなんて考えられもしない。たとえ、自分は「ブリキの切屑」だと思い、「寒いほど独りぼっち」だと感じたとしても、彼は、自己の尊厳と「自由」を手放したくなかった。しかし、目蓋を開けないでいることができるという、こじつけたような「自由」も、所詮は観念の遊戯でしかないことを山椒魚自身、誰よりもよく知っている。こうして自尊心と自由意志という近代の知を支える観念は、閉じ込められた岩屋（自意識の根城）という他と絶縁した場では、その脆さを露呈してしまうのである。「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう¹¹⁾」という夏目漱石『こゝろ』の先生の言葉が想い起こされる。

ことは＜淋しみ＞では終わらない。「悲歎にくれてゐるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかつた」。思想の破綻からくる極端な自己卑下と、それに抵抗する傲慢な意識とがせめぎあい、山椒魚 B には、無意識のうちにどす黒い、悪意ある感情が醸成されるのである。

2.

「昔の人は己を忘れよと云ふ。今の人は己を忘るゝなと云ふ。二六時中己れの意識を以て充滿す。故に二六時中大平の時なし」と漱石が書き記したのは、明治 30 年代の終わり頃である¹²⁾。この知識人を悩ませた自意識の桎梏は、大正・昭和と時代が下ると、いつそう深刻なものになっていったが、井伏も知識人の一人として、この問題に大きな関心を持っていた。

初期の井伏の作品ではこのような知識人の過剰な自意識は、しばしば、

夜更けの「赤い月」によってシンボライズされている。たとえば『岬の風景』（大正15年）では、「真赤なただれた片目」のような夜更けの月が「貴様は悪いやつだぞ」と「私」をとがめる。一方、「私」は「俺は平気だぞ！何も悪いことはしない」、「いらざるお世話だぞ！」と強がり言う。このように「私」の相手をしてくれる月は、もちろん、「くつつくした」思想をもつ「私」が作り出した幻影、「私」の分身である¹³⁾。

「ぬらぬらと」浮かび上がってきて、「私」を糾弾するかにみえるこの「赤い月」は、結局のところ、「私」を正当化するための手の込んだ小道具にすぎない。心の中で、いかに他人になりかわり、自身への辛辣な意見を述べたとしても、その意見には必ず、反論することができる。自分で脚色した論争であれば、たとえ追いつめられているように見えようとも、いかようにも言い抜けることができるのだ。ドストエフスキイはこのような、＜抜け道＞をもつ自意識家を＜地下室人＞と呼んだ。地下室人は、自尊心が傷つくことのないように、社会との関係を絶ち、他から自身を規定されることのない精神の＜自由＞を確保するために地下室に閉じこもる。が、ことはうまくは運ばない。地下室万歳とはゆかないのだ。実際、地下室人は自身の手記をこう書きはじめていた。「わたしは意地の悪い〔＝悪意ある〕人間だ」。この＜自由＞の城であるはずの地下室は、悪意の瘴気が立ち込める息苦しい場所であった。

自分を守るこの地下室人にとっての地下室に相当するのが、山椒魚Bの「岩屋」である。地下室人も山椒魚も「私」も、好き好んで地下生活、岩屋生活をしているわけではない。涌田佑は、井伏の「岩屋」とは大きく言って、物語を描き始めるための「不幸の状況の認定」だと指摘している¹⁴⁾が、これではあまりにも意味が広すぎる。『幽閉』の「岩屋」も『山椒魚』の「岩屋」も、うかうかと住みついているうちに出入れなくなったという「不幸の状況」にちがいないが、両者の差異もまた小さくないのである。

面白いのは、『幽閉』と『山椒魚』では、岩屋の広さそのものが変わっていることである。『幽閉』では「内側」は「可也の広さ」があったが、『山椒魚』では、「彼は体を前後左右に動かすことができただけである」。秋枝美保の言うように、『幽閉』の岩屋の広さは山椒魚の「精神の活動」の広さ

と重なるものだろう¹⁵⁾。『山椒魚』では明らかにその精神の活動が狭められている。あるいは、岩屋が狭まったことで、「その分だけ、閉塞感・危機感が強く鋭くなっている」のだと言うこともできよう¹⁶⁾。付け加えて言うならば、広さの違いは、岩屋そのもの、幽閉されることそのものへの意味づけが変わったこととも関係しているのだろう。ひと言でいえば、岩屋は生の意味を「考究」するような場所ではなく、無意識の悪意を生み出す場所へと変貌したのである。

『山椒魚』の「岩屋」はよく言われるような、＜運命＞を表現したものではない。たしかに話のストーリーだけを追えば、山椒魚 B も、知らないうちに岩屋から出ることができなくなったのである。うっかり出られなくなったことを責めることはできない。失策は誰にでもあることで、その観点から見れば、「岩屋」に閉じ込められことは運命と言ってもよいのかもしれない。

しかし、『山椒魚』という作品は—『幽閉』もそうだが—ストーリーだけで読ませるものではない。ほのめかしもまた重要な物語の一部で（山椒魚のグロテスクな姿かたちはもうそれだけで何かをほのめかしている）、時にはそれは、ストーリーを超える意味をもつ。

ただ『幽閉』では、ほのめかしと同じくらい、論理的な運びにも十分な配慮がなされている。たとえば山椒魚 A は 2 年半の月日の間に、「雨蛙二疋と五尾の目高」とを食べたとある。ここでは、山椒魚というものは「一年に一匹の蛙でも食つていれば十分」だと記されているので、2 年で「雨蛙二疋と五尾の目高」では、目高五匹分ほど、大目に食べたことになる。だから「ほんの少し体が大きくなつて」出られなくなったのだ。それなりに筋が通っている。また『幽閉』では、山椒魚が長い間、岩屋から出て行かなかったのは、内側が「可也の広さ」であったからと理由づけられている¹⁷⁾（「それで彼もうっかりしてゐたのである」）。ところが『山椒魚』になると、そのような説明はいっさいない。「食物のこと、直叙される心情、構成のこと」など、『幽閉』の方が「首尾一貫している」と評される¹⁸⁾のも肯ける。ただここという「首尾一貫」とは、リアリスティックな説明が施されているというほどの意味でしかない。それが『山椒魚』になると、より

徹底した象徴主義的な、喩えの物語へとジャンルを変えたような趣がある。両物語は、読み解くためのコードが違うのである。作者はそのことを意識していたのだろう。昭和4年発表の『山椒魚』には、わざわざ「一童話」という副題を付している。

コードを取り違えると、物語は痩せ細る。たとえば『山椒魚』では、山椒魚の肥大した頭に多く言及されているが、それらを字義通りの意味で受けとれば、おもしろさは半減するだろう。―「頭が出口につかへて外にすることができなかったのである」。「強ひて出て行かうとこゝろみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて(…)」。「山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎてゐたことを、すでに相手に見ぬかれてゐたらしい」等々。繰り返し、執拗に、異様に大きくなった頭への言及が繰り返されるが、なぜ頭は肥大するのか、というようなりアリスティックな問いかけは、ここではもはや意味をなさない。もちろん、頭のいびつな肥大、「頭がつかへる」ことをこれほど特化して強調するのは、滑稽化というだけでは説明がつかない。ナンセンスを装いながらも、作者は同時に真剣なことを伝えようとしている。作者は、山椒魚の＜頭＞、彼を考えさせる「えたいのしれない魔物」こそが、彼を岩屋から出られなくした張本人であると感じさせたいのだ。「何たる失策であることか」と山椒魚は悔やんでいるが、この「失策」を意識できなかったのは、宿命ではない。岩屋から出られないのは、制御できない傲慢な「頭（＝知）」のせいである。

山椒魚 B が「二年間」、岩屋でどう過ごしたかについては、言及がない。しかし、書かれているところから想像すると、岩屋から出られないとわかる前も、自由や独立、自己等をテーマとした自身との「考究」に余念がなかったのだろう。考えは、歯止めなしに際限もなくわき上がる。ああも考えられるし、こうも考えられるというのが、＜自由＞を標榜する B の思考の特徴である。プーシキンの言葉を借りて言えば、実際がどうであろうと「その意識^{おもひ}あらば、我は足る」(『吝嗇の騎士』)はずであった。しかし、地下室人の場合と同じで、「意識」を盾にし続ければ、自由であるかのごとく思えるが、生身の他人は遠ざかり、ついには自分独りになる。山椒魚 B もまた地下室人のように孤独を感じ、自分の手にしている＜自由＞の空虚さに気

12-井伏鱒二における＜悪意＞の問題—『山椒魚』を中心に

づくことになる。

ドストエフスキイはしかし、地下室人のその後も描いた。ラスコーリニコフを主人公とする『罪と罰』である。ニヒリストとしてのラスコーリニコフは地下室人のその後の一つのありうべき姿である。『山椒魚』は『地下室の手記』だけでなく、この『罪と罰』の内容をも含みこむ。

『罪と罰』と『山椒魚』、これまでその関係は論じられることはなかったが、何より興味を引くのは、「二十歳の秋」（昭和5年「文学風景」10月号）である。二十歳の秋、何を読み何を考えたかという問いかけに、井伏は次のように答えている。早稲田文科の学生であった当時、「落胆して隠岐の島へ行つてゐ」たが、そこで「チェホフの短篇集とドストイェフスキイの長編を読み、バクゼンと自分も小説を書きたいと思つてみました」。ロシア文学が圧倒的に流行していたその時代、彼はチェーホフと同じくらい、ドストエフスキイにも魅かれていたのだ。エッセイ「困難なこと」（昭和6年5月）ではチェーホフ、バルザックと並べて、ドストエフスキイの翻訳書を「学生のときから繰り返し読んで」おり、「単にドストイェフスキイの概念を明らかにするにさへも、私は二十年の歳月を要するであらうと覚悟してゐる」と記している。さらに、最も好きなドストエフスキイの作品はという昭和9年のアンケートでは、『罪と罰』と答えている。

これまで『山椒魚』といえば、チェーホフの『賭』のように悟りを得る過程を描きたかったという井伏自身の言もあり、『賭』の影響が多く取りざたされてきた¹⁹⁾が、これはおそらくは主として『幽閉』、なかんずく、閉じこめられた人間が悟りに入ってゆくという物語の結構に限ったことである。改稿を経た『山椒魚』では、山椒魚は自分が閉じ込められるだけでなく、蛙を閉じ込める。一言でいうと、自分と同じ境遇に他を陥れて、同じ苦しみを味わわせてやりたいというどす黒い感情が無意識に働いたのだ。この感情はチェーホフの『賭』とはまったく係わらない²⁰⁾。

このような悪意の問題を扱ったのは井伏だけではない。日本では後述するように宮沢賢治がいるし、目を外にやれば、井伏が読んでいたゴーゴリでもドストエフスキイでも、この＜悪意＞が近代の大きなテーマとして取り上げられている。傲慢な知に取りつかれた知識人たちは、最終的にはわ

けのわからぬ「悪意」の支配を招く、というその考え方は、ゴーゴリ、ドストエフスキイにおいてまったく同じである。ただゴーゴリと異なり、ドストエフスキイは、「悪意」が単なる「悪意」で終わらず、実際の行動を生むことを示した。

『罪と罰』のラスコーリニコフの悪意は、彼が獄中で見た「旋毛虫」の夢において表現されている。「人間の体に巣くう極微の生きもの、新しい旋毛虫のようなものが出現した。だがこの生きものは知と意志を与えられた精神であった²¹⁾」。この「旋毛虫」に取付かれると、人は「悪魔憑き」のようになって、これまでなかったほど自身のことを頭がいい、真理を発見したと思ひ込む。そしてそのように驕りたかぶる人々は互いに、「なにかしら無意味な悪意」を持つようになる²²⁾。ちなみにラスコーリニコフは自身を「非凡人」と見做し、その非凡人であることを自身に証明しようとしていたが、これは元をただせば、非凡人として、「卑劣漢」を除去し、人類を救済してやろうと考えていたからにほかならない。彼の人々に対する悪意は本物だが、人類救済などというのはどこまでも、想念としてとどまりうるものである。しかし彼は実際に、試みとして、「卑劣漢」である金貸しの老婆を<除去した>。なぜ彼は、本当に老婆を殺してしまったのか。

ソーニャに、人を殺めたことを悔いるように諭されると、彼はこんなふうに反論した。「それはみんな、ぼくが暗闇で寝そべっていた時に、もうさんざん考え、何度も自分に囁いていたことなんだ……。そんなことはみんな自分自身を相手に議論したことなんだ、細部の細部にいたるまでね。すべてを知っている、すべてを！　そしておしゃべりにあきあきした、その頃からもうあきあきしていたんだよ、そんなおしゃべりにはね！²³⁾」。思想だけでは殺人には至らない。「おしゃべりにあきあきした」から、自分をもてあまし、どうしようもなく苛々していたから、ラスコーリニコフは、老婆の頭に斧を振り下ろしてしまったのだ。

山椒魚 B も<考え>ではおさまらない。岩屋から出ることができないとわかった山椒魚 B は、ついには岩屋の出口にやみくもに突進する。そして、もはや出ることにはかなわないと確信すると、抑えがたい悪意が芽生えてくる。この悪意の到来によって、彼は新たな行動を起こしてしまったのだ。

屈託することから生まれ出てくる＜悪意＞めいたものは、『屋根の上のサワン』でも取り上げられている。

散弾銃で傷つけられた雁（サワン）と出会ったのは、「私」が「言葉に言ひ現はせないほどくつたくした気持」で散歩している時であった。雁を助け、手当てをしたのは、かわいそうだというだけではない。孤独で「屈託」している「私」にとって、傷ついた雁は自分にとっての格好の慰め手となる。もちろん、傷が癒えれば、野に返すつもりであったのかもしれないが、実際は、雁の傷がすっかり治ってしまったあとも、「私」は「この鳥の両方の翼を羽だけ短く切つて、庭で放し飼ひにすることにし」た。サワンが逃げるそぶりを見せた時には、「三日かゝつても食べきれないほどの」大量の餌を与えた。しかし「私」の思いなど気にもかけず、サワンは恩を仇で返すように逃亡してしまった。ショックを受けた「私」は、自身の間の悪さを取り繕うかのように、サワンは「僚友達の翼に抱へ」られ、「季節向きの旅行」に出て行ってしまったのだらうと思ひます。しかし、こんなふうにくら事実を美化しようとも、自分の慰みためにサワンをあえて飛べなくし、自分の所有物にしようとした「私」の行為は消すことはできない。そこには明らかに＜悪意＞めいたものがあつた。

興味深いのは昭和3年の『鯉』の改作である。改作以前、大正15年の『鯉（随筆）』にはポエチカルなところがある。「東京で一番ミゼラブル」であると思つている「私」だが、この「私」の鯉が早稲田大学のプールで悠々と泳ぎまわっているところを描いた場面には、一種の詩情が漂っている。「鯉の後ろには、数匹の鮒と数十匹の^{はや}鯢とおくれまいつき纏つて泳いでゐて、私の所有である鯉をどんなにか偉く見せたかもしれないかつたのである。／私は此のすばらしい光景に感動したあまり涙を流しながら、そつと跳込み台から降て来た²⁴⁾」。ここで強調されているのは「私」の鯉が「王者のごとく」悠々と泳ぐその「すばらしい光景」である。「未だ」死ななで、プールの中を威張つて泳ぎまわっている「私の鯉」。鯉が亡くなった親友の青木南八からもらつたものであることを考えれば、この一節は、「私」の心の中で南八が「未だ」生き続けていることへの「安心」を示すものであつたと言えよう。おそらくこのような「ミゼラブル」な「私」の詩情は、

閉じ込められた悲しみに浸っている山椒魚 A をも包み込んでいた²⁵⁾。ところが改作され、『夜ふけと梅の花』に収録された『鯉』は違う。「(随想)」が消え、物語がフィクションになると同時に、美しい心情を壊してしまうような奇妙なものが入り込んでくる。

書き変えられた『鯉』の「私」も孤独でミゼラブルな思いでいることは改作前と同じである。その「私」が冬になって再びそこにやってきて、プールの水の上に積もった薄雪の上に長い竹竿で大きな「白色の鯉」を描く。それだけではない。「私」はその鯉につき従う鮒や目高たちの絵をそこに描き加えた。「絵が出来上ると、鯉の鼻先に「……………」何か書きつけたいと思ったがそれは止して、今度は鯉の後に多くの鮒や目高とが遅れまいとつき纏つてゐるところを書き添へた。けれど鮒や目高達の如何に愚で惨めにみえたことか！ 彼等は鰓がなかつたり目や口の無いものさへあつたのだ。私はすっかり満足した」。この「満足」はもはや死んだ親友とは関係しない。

引用の「……………」の部分にはおそらく、「サワンよ、月明の空を、高く楽しく飛べよ」といった類の「忠言」のようなものが入るのだろう。『鯉』の「私」も、『屋根の上のサワン』の「私」同様、自身の美しい心情をたしかめたかったのだ。しかし、こんな鰓もなく目や口も欠けたいびつな絵を描いておいて、「思ひぞ屈した心」から脱出したとは到底言えるものではない。脱出どころか、その絵はむしろ鬱屈し、いびつになった心を露わに示している。東郷克美はこの絵を評して、「作者は負け惜しみを承知でひそかに溜飲をさげたのかもしれない²⁶⁾」と述べているが、ことはそんなちよつとした「負け惜しみ」の問題ではあるまい。「すっかり満足した」という「私」には何かしら＜悪意＞に近いものがある。

悪意そのものに焦点を当てたような作品も井伏にはある。昭和4年に発表された『一びきの蜜蜂』である。『朽助の谷間』と同じ朽助がここにも登場するが、この物語では彼はしぐれ谷で養蜂場の「番人」をしている（養蜂場の持ち主は「私」である）。「私」はどうやら文筆で身を立てて行こうと思っているらしいが、うまくゆかず、毎日を屈託して過ごしている。貧乏暮らして金はない。「私」は自費出版したとか、入院したとか、あれこれ偽の口実をつくって、事あるごとに送金を依頼するが、その金を工面する

ために蜂はどんどん売られ、89 箱もあった蜜蜂はいつのまにか最後の一箱が残るだけになる。そしてその最後の蜂たちはあろうことか、逃げてしまった。そんな散々な状況下でも、朽助は蜂の残していった蜜入りの巣を送ってくれた。この巣の蜜を蓄える部屋の中から、「私」は偶然、「孵化」したばかりの一匹の蜜蜂を見つける。この「誤った場所で誤った時節にこの世に出てきた」蜜蜂、この「一ぴきの迷へる昆虫」をどのように扱うのか、それがこの物語の主題となる。

「私」は最初、蜜蜂を逃がしてやったが、半日ほどで戻ってきた。その後、二、三日、蜜をなめさせてやっていたが、そうするうちに蜜蜂は、「最早労働に出かけて行かうとする精神は忘れて、巣のまほりをぶらついてばかりゐる」ようになった。その体たらくを見て、「私」は自分のふがいない姿を指摘されたように感じ、蜂を叩き潰してやりたいという衝動に駆られる。「私」の苛々はどんどんエスカレートしてゆき、「火箸の先に怨恨を込めて彼の頭を突つ」くようなことまでやるようになる。以後、「私」は、蜂が自分の「現在」よりどうしようもない状態になってゆくを見るために、蜜をたくさん与えて、ぶくぶくと肥らせる。わざわざ自分より不幸な者をつくり、その者との比較を「気やすめ」にし、自分の不幸を軽減しようだなんて、これはもう尋常な心理状態ではない。

結局、蜜蜂は「私」が文鎮で叩き潰すより前に死んでしまうことになる。—「在る朝、金網をとつてみると、彼はひつくりかへつて数本の脚を空に向け、大皿の一端にころがつてゐたのである。私は痛快であつた。私は—この私は、まだこんなに生きてゐるではないか!」。蜂が死んでも「私」は哀れに思うどころか、「痛快」であつたという。強烈な＜悪意＞を表現するこの「痛快」という語は、『山椒魚』でも使用されている。—「山椒魚は相手の動物を自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であつたのだ」。

山椒魚 B 同様、死ぬほどの苦しさ、辛さに身もだえしている「私」は、たとえ自身の感情が嫌悪すべきものであると分かっている、どうにもコントロールできない。理性では、沸々と湧き上がってくる悪意にみちた感情を抑えきれないのだ。

それではいったい、この悪感情をどう扱えばよいのか。チェーホフなら

ば、作家の役割は現実を診断し、問題を「正しく」提起すればそれでいいので、どう解決すべきかは読者の問題であると言うだろう²⁷⁾。しかし、井伏は違う。彼は、どうにもならない悪意の感情をどう減じていくか、という具体的な対処法をあえて提起しようとする。そこが、チェーホフとの資質の違い、まさに井伏の井伏たるところだろう。

では、彼は湧きあがる悪意に向けてどのような対処法を持ち出すのか。『一ぴきの蜜蜂』にあっては朽助の言葉が、また『山椒魚』にあっては蛙の言葉がその鍵を握っている。

3.

山椒魚 B にしても、『一ぴきの蜜蜂』の「私」にしても、悪意の感情には彼らの自尊心が絡んでいるので、それを浄化するのはきわめて困難である。おそらく山椒魚は相手を閉じ込めた当初から、蛙にすまないことをしたという罪の意識を感じたのだろうが、自尊心（＝傲慢さ）が相手の解放を妨げる。たとえ相手を解放できたとしても、自尊心が元のままであれば、山椒魚が変わることはないだろう。蛙の側にも自尊心（＝誇り）がある。自分にはまったく非がないのだから、相手に頭を下げることなど考えたくもない。

こうして最初の一年は、山椒魚も蛙もお互い、意地を張りあって喧嘩ばかりしていた。蛙は、山椒魚が頭が肥大しすぎて岩屋の外に出てゆけないことを見抜くと、そのことを揶揄する。すると山椒魚も、「お前だつてそこから出ては来れまい」とやり返す。互いの罵倒で毎日が過ぎてゆく。

1 年が過ぎ、また夏が来るが山椒魚も蛙も沈黙し続けていた。どちらも相手に弱みを見せることを極度にいやがる（「お互に自分の嘆息が相手に聞こえないやうに注意してみた」）。勝負をしているかのような雰囲気だが、結局、さきに蛙が思わず嘆息をもらしてしまう。というのも、「去年と同じくしきりに杉苔の花粉の散る光景が、彼の嘆息を教唆した」からである。『幽閉』ではこの移り変わる光景を「流転」という言葉で示していた。流転とは生命体に特徴的なもので、不可逆的に時が流れていることを示す。山椒魚 A はこの「流転」を「考究」の対象にして自身の不幸な状況をまぎ

らわそうとしたが、『山椒魚』の蛙には、そんな観念の遊戯は縁がない。おそらく彼は、「流転」する世界であるにもかかわらず、自分たちだけは少しも変わらないこと、相も変わらずいがみ合いを続けていることに思いが至って、気持ちが萎えてしまいそうになったのだろう。長い間、何も食べることができず、弱りきっていたこともある。

蛙が嘆息をもらすと、すぐさま山椒魚は反応する（「山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかつた」）。一挙に状況が変わるのである。相手側が少しでも弱みを見れば一つまり相手が心から自分は下であると認めればゲーム・オーバーで、山椒魚は強者としてすべてを恕す。恕すだけではない。自己の精神の優位が確定すると、和解の手を差し伸べ、自分がすべて悪かったと謝ることさえやぶさかではない。彼はしてやったりと上のほうを見上げ、「友情を瞳に込めて」、「お前はさつき大きな息をしたらう？」と尋ねる。おそらく関良一が山椒魚に「一脈の善意」ありと見なすのは、この「瞳に込め」られた「友情」から判断してのことだろう²⁸⁾。しかし、これは友情もどきであり、ドストエフスキイがよく取り上げる自意識家の＜愛＞のシステムである²⁹⁾。山椒魚はこんな自尊心を満足させるやり方でしか、つまり支配者としてしか、相手を愛せないのだ。『屋根の上のサワン』の「私」も、事情はよく似ている。サワンが心の底から感謝の意を表明し、懇願していれば、「私」は快く彼を「僚友達」のもとに送り出してやったかもしれない。あるいは懇願されても、自身の屈託した思いを慰めるために手元に置こうとしたかもしれない。すべては自分のかつてな都合である。

では蛙はどうか。逃げるができないように羽を短く切られたサワンの気持ちはわからないが、閉じこめられた蛙は自身の思いをストレートに表現する。彼は悪態を吐きながらも、最後には「今でもべつにお前のことをおこつてはみないんだ」と、山椒魚に告げる。何かへんだ。蛙はある評者の言うように、「「眼をつぶって」、「理屈」ぬきに一足とびの＜和解＞に到」ったのだろうか³⁰⁾。

どうにも腑に落ちない。そもそも＜和解＞というようなものがあつたのか。「今でも（…）おこつてはみない」？—これまでも怒っていなかったのなら、どうしてこれまで蛙は悪意なしに悪態を吐きつづけたのか。

井伏の作品世界を見渡すと、悪意なしに悪態をつくのはどうやら蛙だけではない。たとえば『シグレ島叙景』（昭和4年）の村上オタツと伊作、『丹下氏邸』（昭和5年）のエイと彼の妻オタツ。『シグレ島叙景』の「私」に言わせれば、村上オタツや伊作にとって「言葉といふものは口論するためにだけ存在し」ているのである。悪意などなく、むしろ相手を思いやっているにもかかわらず、彼らは意地を張り、腹にもない言葉で相手を罵倒する。オタツがいなくなると、狼狽し、心の底から同じ「ギンナガシ〔ルンペン〕」である相手の身を案じている伊作だが、彼女が戻るともう、相変わらずの悪態を吐く。オタツがわざわざ土産物としてくれた足袋も、こんなふうにくさす。「お前らは、いきしもどりし（出戻りの意）であらうがな。そのやうなものが呉れたる足袋は、腐り臭くて履けはせぬ！」。伊作はほんとうはうれしくてたまらないのに、感謝の気持ちを言葉にすることを極度に恥ずかしがっている³¹⁾。丹下氏（『丹下氏邸』）のエイを評した言葉を加えて言えば、彼らはまさに羞恥心をもった、意地っ張りの「あまのじやく」なのである。そのように見てくると、「出て行かうと出て行くまいと、こちらの勝手だ」、「お前こそ頭がつかへて、そこから出て行けないだらう？」などと山椒魚に悪口雑言を吐く蛙は、エイやオタツに通ずる庶民（民衆）の一つのタイプであることがわかってくる。蛙が「山椒魚より先に」「不注意にも」深いため息をついてしまったから、物語の展開は＜和解＞の様相を呈することになったが、体力があり、心が弱らなければ、悪口はさらに続いたことだろう。

しかしここで疑問がわく。蛙がいくら意地っ張りの「あまのじやく」であるとしても、彼はなぜ怒らないのだろう。相手側の都合で災厄に巻き込まれ、死の一手手前まで追い込まれているのに、蛙はどうして恨んだり、泣き言を言ったりしないのだろう。その問いに答えるような興味深い作品がある。『村上オハツ』（昭和5年）である。

『村上オハツ』は「慾ばかりで残忍で容貌が醜かつた」村上オハツと、彼女の飼っている「不幸な」犬、シロの物語である。オタツは苛々するとシロの片耳を鉤で切断したり、尻尾を「ギロチンしようとした」り、果ては片目の眼球を取り除いてしまったりする。「私」はその残虐極まりないや

り方に強い憤りを感じ、「彼女の胸ぐらをつかんで、不幸な犬を愛せよとか、お前自身のいらいらした気持はお前の罪ではないと同時に愛犬の罪ではないとか言つた」。いかにもまっとうで理にかなった言葉である。しかし、かばってもらった犬のほうは、感謝するどころか、「私」にむかつて吠え立ててくる。その姿はひどく折檻されても、主人、丹下氏に対する律義さをうしなうことのないエイや、ダム建設のために自分の家を失うことになっても、その悲惨な現実を最終的に受け入れる朽助とも重なる。

『村上オハツ』の物語の妙は、「私」がこのシロを日本の民衆に関連づけているところにある。シロは顔かたちからするとテリア種、尾の形からするとセッター種であったが、「律儀なる点から見ると日本犬であつた」。「彼〔シロ〕はどうやら現代の民衆のごとく悲痛なる現実によく耐え忍んだのである」などと。同じような観点から井伏は、こんなことも述べている。「いかなる時代に於ても、あらゆる社会現象の上に変化の起こらないといふことはない。人は生れ、且つ死んで行きさへする。そして、最も正しきもの、最も貧しき者のみが、常により多くの重荷を背負はされてゐる」（「散文芸術と誤れる近代性」）。井伏の用語の使い方からすれば、社会現象の上に起こる変化によって引き起こされる矛盾、あるいはその矛盾の変質が「近代性」というものである。山椒魚の頭の肥大はまさにこの「近代性」によって引き起こされたものであった。その「近代性」によって生み出された悪意に巻き込まれたのが＜民衆＞、蛙である。そして、この蛙はしたたかな「あまのじやく」であると同時に、オハツの飼犬シロのように、どんなにひどい目に遭わされても、憤りを感じることはない＜聖者＞でもある。

蛙が背負っている理不尽な「重荷」は、『罪と罰』で言えば、売春婦であるソーニャ・マルメラードワが背負っている。彼女は「黄色い鑑札」をもらって身売り、その金でマルメラードフ一家を支えているにもかかわらず、その職業ゆえに同じ家にも住めない。周囲からは軽蔑され、売春婦ならやりかねないと、泥棒よばわりされることもある。みじめな思いをしなければならぬのは、けっしてソーニャのせいではない。にもかかわらず、彼女はどんなひどい仕打ちに遭おうとも、誰を憎むこともない、いや、憎めないのだ。昭和6年3月の「作品」第11号に載せた「〔二月の作品——

一人一作評]」において、井伏は、『罪と罰』の作者はソーニャのことを「あまり精密に書いてゐない」が、「ソーニャの純情」は「鮮明に表現されてゐる」と述べている。おそらく井伏は、自分の苦しい身の上よりも他の人々の辛さを気遣うソーニャの「純情」こそが、殺人者ラスコーリニコフの魂を救うのだと考えたのだろう。

とはいえ、敬虔なクリスチャンであるソーニャをそのまま、日本の現実を持ち込むことはできかねた。屈託し、時に悪意に蝕まれた井伏の「私」を救うのは日本の「民衆」である朽助たちの特異な「純情」である。この「純情」の意味するところは広い。『丹下氏邸』のエイや彼の妻オタツが純情な者の代表格であるように、井伏にあっては「純情」は「あまのじやく」の仮面をかぶっていることもある。

「現世の悪漢に聖なる幼児の心を思ひ浮べさせる一種の子守唄」。これは、井伏による坪田譲二の『正太の馬』の評であるが（「坪田譲治」昭和4年5月）、同時に井伏自身の作を語ったものでもあろう。「幼児の心」を思い浮かべさせる「子守唄」は時にラッパとなったり、単に「うた」と呼ばれたりする。あるいはそれは、『丹下氏邸』の中の表現を使えば、手を触れてみたくするような「純白の綿毛の玉」である³²⁾。井伏はこの純情を感じさせるラッパの音色や「うた」、白い「綿毛の玉」を使って、「愚蒙たる風貌」を装っている「現実といふもの」を素直な性質にしよう、「幼などきの率直さ」を思い出させようと試みる（「なつかしき現実」）。この文脈を『山椒魚』に持ち込めば、荒んだ「現実」をシンボル化した山椒魚の悪意に対してラッパを吹くのはどうやら、純情な蛙の役割である。

4.

宮沢賢治が無意識的なものに多大の関心を抱いていたことは、よく知られている。たとえば「農民芸術概論綱要」にはこうある。「諸作無意識中に潜入すればするほど美的の深と創造力は〔加〕はる³³⁾」、「無意識〔部〕から溢れるものでなければ多く無力か詐偽である³⁴⁾」。これは「農民芸術の製作」について述べられたものであるが、その趣旨は、いくら努力しても、作為的「芸術」は本ものにならないというところにある。一方、井伏

もまた「アンコンシラスネスの魅力」（昭和4年）という文章の中で、「プランセツト」（こっくりさんに使う占い板）を使用せず、理論だけで作り上げた文学はつまらぬものになると述べ、賢治と同じように無意識の重要性を強調している。井伏はまた、「まことの芸術」に必須のこの無意識（「アンコンシラスネス」）を「ナンセンス」とも言い換えているが、この言葉はある種、『山椒魚』の論理を跳び越えてゆく語りの特徴を物語っているようにも思われる。

無意識そのものはすでに明治期に、夏目漱石によって主題化されている。たとえば『夢十夜』（明治41年）はその典型である。フロイトが夢を抑圧された願望の表現として捉え、『夢判断』を著したのは1900年（明治33年）のことだが、その影響もあったのか、漱石は、不条理な夢を通して個の無意識世界に渦巻くものを描き出した。ただ、無意識的な悪意という問題は漱石にあっては検討されることはない³⁵⁾。無意識問題はまた、横光利一などにも共有されてはいるが（たとえば『機械』では、「私」の知らない「無意識」の＜私＞が問題にされている）、悪意としての形をとらない。昭和の初期までに限れば、わたしの知る限り、マイナスの無意識として悪意の問題を掘り下げ、その悪意からいかに逃れるかという視点から近代人の救いに大きな関心を寄せたのは、賢治と井伏だけである。

宮沢賢治の土神（『土神ときつね』）は、狐への嫉妬からくる無意識的な悪意、苛々を悟りによって抑え込もうとして失敗する。—この展開はまさに『幽閉』だ。悟りでは救われないマイナスの無意識（「何か巨きな黒いもの」—『セロ弾きのゴーシュ』）に対抗して賢治が最終的に頼るのは、プラスの無意識とも位置付けられる「諸仏菩薩ノ冥助」であるが、井伏もまた、プラスの無意識を考えた。ただ彼がもちだすのは「仏」や「菩薩」ではない。井伏が無意識問題でどこまでも関心をもつのは、純な、心に染み入る言葉である。彼にとって純な言葉は一種妙薬のような効能がある。たとえば昭和3年1月に『少女画報』に発表した『幻のさゝやき』を取り上げてみよう。

舞台は隠岐の島、物語の前半は、都会から来た美智子と土地っ子の麗ちゃんが櫓すべりをする話で、その話の筋はチェーホフの初期の短編『たわ

むれ』をほぼなぞっていると言っていい³⁶⁾。ただ少年と少女の話であったチェーホフの物語は、井伏では少女二人の物語になる。チェーホフでは櫓すべりの最中に風の音に紛らわせ、少年は相手に「愛してるよ、ナージャ」とささやくのに対し、井伏では、櫓すべりの最中に少女（美智子）が少女（麗ちゃん）に「わたし、麗ちゃんが好きよ」と言う。どちらの＜告白＞も、言われた方は、本当に相手が言ったのか、空耳なのかが分からない。どちらも、幼いながらも、そのような愛の告白をめぐってゆれる女心が小説全体の主題となる。ただチェーホフでは、なぜあんなことをしたのだろうと、大人になってしまった男が過去を振り返って終わるのに対し、井伏の物語では、さらに話はつづく。すなわち物語の後半、麗ちゃんが風邪をこじらし高熱を出す。病は重くなり医者ももう駄目だと匙をなげるほどであったが、美智子はふと、麗ちゃんの枕元で「わたし、麗ちゃんが好きよ」と囁くことを思いつき、実行する。すると瀕死の状態にあった病人であった少女がその言葉によって、急に元気づく。そしてとうとう、麗ちゃんは目をはっきりと開け、思いあぐんでいた幻の囁きの正体を知る時が来る。麗ちゃんは、「このなつかしい言葉を誰が囁いてゐるのかをはつきり知つて、そして嬉しさに涙を流す」のである。

読者が幼い少女たちであることを意識したのか、小説としてはたわいもないものだ。だからこそ、「なつかしい」言葉は＜薬＞の効果もつのだという作者の考えも、気恥ずかしいほどに透けて見える。ここでは悪意の問題は扱われないが、もてあましていた知識人の＜悪意＞の発現も、井伏は病のようなものと考えようとしたのだ。こうして『一ぴきの蜜蜂』（昭和4年7月）では、朽助の純な言葉が、屈託し、悪意に取りつかれた文学青年である「私」への＜特効薬＞として試されることになる。

『朽助のある谷間』（昭和4年3月）と『一ぴきの蜜蜂』は、ともに朽助と「私」が登場するが、その役割は違って、前者は「私」が朽助を助けようとする話、後者は逆に、朽助が「私」を助けようとする話である。前者の「私」は結局、朽助の力になれず、後者の「私」は朽助に救われる。この二つの物語が作品集『夜ふけと梅の花』の冒頭と最後に配置されているのは偶然ではあるまい。

『朽助のある谷間』では、ダム建設のために家を沈められてしまうことで屈託し、いらいらする朽助のもとに「私」が差し向けられる。「私」は、朽助の「利権擁護」のために「運動」してやろうと、東京から意気込んでやってきたが、来てみると、朽助には新たな家が用意されていて、「門樋番人」として雇われ、月給も支給されることになっていた。そのような手厚い補償があることを知った「私」は拍子抜けし、一転、権利を盾にした立ち退き反対運動（「新しい闘争」）などやめるようにとさとするようになる。朽助は「私」の助言を聞きいれず嘆き続けるが、その嘆きに対して「私」はなすすべもない。自分の家を池の底に沈める人々への悪意を感じる朽助が「大声で狼狽」しても、「私」はそんなに大声で狼狽したりしては、人々が「嘲ふ」と「注意」するだけである。＜頭でっかち＞の「私」には、朽助の心の中にまで踏み込んで、彼の味わっている深い悲しみを癒すことなどできないのだ。一方、往復書簡の体裁をもつ『一びきの蜜蜂』の方は、芽の出ない文学青年、屈託した東京在住の「私」に対して、朽助が手紙を通じてさまざまな忠告を行い、精神を奮い立たせ、悪意を消し去る構成になっている。問題はどのようにして自尊心の抵抗を和らげ、朽助の忠告の＜言葉＞を滋味あるものとして「私」に受け入れさせるか、だ。

朽助は、不幸な蜂を愛せよというようなヒューマニストふうの、高みから見下ろしたような物言いはせず、蜜蜂に対する「私」の態度を、やわらかな方言でくるんだ言葉で諫める。—「蜜蜂の死相をあのように邪見な仕打ちで物申されたことは、咎とや申さねばなりません。貴殿は、今回のやうな横死を遂げた蜜蜂のやうに貴殿自らがいくぢない申されますならば、何故に蜜蜂のいくぢのないのを素つ気なくなさるお心にて、ご自分を打ち懲らさうとはなさるんだか」。「私」は蜜蜂を叩き潰せばすっきりすると言うが、それは、朽助に言わせれば、観念の遊びだ。「貴殿のお考へは、どういたしても遊びごとのやうに思はれて、合点がいかんです。それ、人は成心の指さすところを師とすれば、誰か一人はた師なからうやであります」。「成心」云々は『莊子』の齊物論篇からの引用である（「夫随其成心而師之、誰独且無師乎」）。朽助はさらに言う。「蜜蜂のいなげな暮しかたを素気なくなさる心にて、存分に人と人とのなかに出て行きなされてよろしと

考見申します」。ぶらぶらして過ごす蜜蜂の姿を良しとしない心がある、それこそが「成心」(生まれながらの心)なのだろう。内からこのままではだめだという声がするのであれば、その声に耳を傾けよというのだ。

しかし、今のままではだめだと納得できても、次の一步を間違わずに踏み出すにはどうすればよいのか。一步を踏み出すことを億劫がった、このような、想定される「私」の後ろ向きの問いかけに対しては、朽助はこんなふうに釘を刺す。「どういふことが間違ひないことかは、人と人とは同じ人間でなければ、わかるものではないと思召されたく」。みんなそれぞれが違う人間であるとすれば、絶対正しいということはない。『鉦山地帯病院』(昭和4年)の「おやちさん」の言葉をもじって言えば、自分は絶対正しいと信じ、「間違ひない」と思って吐く言葉は「贗造紙幣」のようなものだ。頭で<普遍的な真理>を考えていても分かるものではない。人間の中に入って、同じ人間であることを感じながらことを進めなければならない。—おそらく朽助の言いたいのはこのあたりだろう。続けて、朽助は、自分はどうせ駄目な人間だからという「私」の言訳を前もって封じ込めるかのよう、こう論ず。「愚者もともにあり〔この心の師は、愚者にもおのずから具わっている〕とや申すことは、ご存じの通りと存じ奉ります」。「愚者もともにあり」。これもまた『莊子』齊物論篇に出てくる言葉である(「愚者と有焉」)。そして締め括りは、「めくつてみたるのがスペードならば、それはスペードでよろしいです」。人為的なものも自然の一部、すべては自然のはたらきのままにまかせよということだ。しかし、自然のはたらきのままにまかせよなどと仰々しく言われると、知識人たる「私」は、上から教諭されることの屈辱感から拒否反応を起こすにちがいない。「スペードでよろしいです」、この朽助独特の言葉を、『丹下氏邸』の登場人物の言葉を用いて言い換えれば、「所詮は、屁はカゼですがな」となろう。「スペードでよろしいです」、「屁はカゼですがな」、—こういった飾り気のない言葉なら「私」もすんなりと受け入れることができる。

しかしそれにしても、朽助と『莊子』とは、意外な取り合わせである。あるいは井伏は、朽助をだしに使って、自身が大きく影響を受けた『莊子』の言葉を「私」に伝えようとしたのか。いや、問題はもう少し複雑、微妙

である。ここではなにより、朽助の口から『莊子』の言葉が出てくることに意味があるのだ。なるほど、朽助はあたかも教養ある知識人であるかのように『莊子』を引用する。しかし彼の『莊子』は単なる表面的な知識、飾り物ものの＜教養＞ではない。たとえば彼は言う、「中田屋の馬（註—よく走る馬で競馬では常に一等賞をとる馬）になりなさるな、くろがね屋の牛（註—盲目の牛で溝に沿うて歩く時には極度にのろく歩む。この牛は十数年前に死亡した）になりなされ」と。この格言めいた言葉には彼自身の「ハワイ出稼ぎ中」の苦労、体験が深く係わっている。—「小生若年の頃ハワイ出稼ぎ中、ひどく廃頰してをりましたれど、巡査志願にすべり、そのやうな考へにてはいけぬと思ひ、たうたうこのやうに申す考へになりましたぞ」。「中田屋の牛」云々の格言と同じような重さをもつものとして、朽助は『莊子』の言葉を口にする。言い換えれば、「中田屋の牛」同様、『莊子』の言葉にも、彼のこれまでの苦難に満ちた人生が織り込まれているのだ。

知識を鼻にかける気持ちが少しでもあれば、『莊子』からの引用は、それこそ『谷間』の「私」のように「演舌をこく」ようなことになりかねない。あるいは演説とまではいなくても、うわべばかりの知識人の言葉（「贗造紙幣」）の＜効能＞はほとんど期待できない。実際、『埋憂記』（昭和2年）では屈託している「私」に対して、友人の在竹は「絶望しないでやるのが一等です」と至極まっとうな忠告をするのだが、その言葉は「私」の心になんらの痕跡も残さない。なぜなら、絶望するなと忠告する在竹自身が絶望しているのだし、「私」自身、その言葉は心の中で数限りなく反芻していること、分（わ）かりき（き）ったことだからだ。そしてなによりその硬直した＜言葉＞には、朽助が「私」に抱いているような、相手を心底思いやる「テンダネス」（『鉦山地帯病院』）がない。

地下室人、あるいはラスコーリニコフのように、『一ぴきの蜜蜂』の「私」も、どうすればよいかぐらい、百も承知なのだ。実際、「私」は世に発表しようと、「心さわがばデモに出でよ、心晴れなば恋人に詩を捧げよ」という書き出しの「美文体」の文章も書いている（その題もまた『柑橘類の花散る園の懷疑』という美文調のものである）。すべてを自然のはたらきのまま

にまかせよというメッセージであれば、なにも仰々しく『莊子』を持ち出さずとも、「私」自身も感じていたことなのである。繰り返すが、すべてわかっているのにどうにもならない精神のパニック状態が続くからこそ、悪意の感情が生まれてくるのだ。

タエト（『朽助のゐる谷間』）はパニック状態の小鳥を救うために石を投げつけた。水没した自身の巣から離れられず、いつまでも水上を飛び回る小鳥に、彼女は、「ほうい、ほうい！」と叫びながら、石を投げた。何回目かに頭上を石がかすめると、小鳥は驚いて「山腹の茂みのなかに消えてしま」う。自分の羽音に興奮していた小鳥は、石によって注意がそらされ、一瞬にして「羽音」が聞こえなくなったのだ。そしてそうやってはじめて、鳥は落ち着きを取り戻せたのである。『一ぴきの蜜蜂』の「私」も自身の内から発せられる＜羽音＞から逃れられない。自己を嫌悪する意識はさらに大きな自己を嫌悪する意識を生む。その意識を意識するとまた、新たな意識に苛まれる。意識の作用は止むことはない。このような「私」（＝知識人）のとめどなく増幅してゆく嫌悪の意識の連鎖を断ち切るには、他からの言葉、タエトの石ころならぬ朽助の生きた＜言葉＞が必要であった。

この朽助の生きた言葉は『谷間』（昭和4年）のリズミカルな、母親の挨拶の言葉を想い起こさせる。「それは難解な田舎言葉の唱歌にすぎなかったが、私はまだ一度もかういふ朗らかな内容をもつてゐる人間生活の讃歌をきいたことがない。私は深く頭をたれて、その讃歌をきくのがすまいとしてゐたのである」。この母親の言葉が「私」に対して及ぼした効果、あるいはそれ以上の効果が、朽助の言葉にはあった。実際、朽助の言葉を受けて、「私」は言う。「僕も、一枚めくつてみませう。めくります！ スペードでもよろしい！」。これは相手の気を悪くさせないための儀礼ではない。なにより、二つの感嘆符がそのことの証となる。

このことに関して興味深いのは、「[手帖]」（昭和5年1月）の井伏の言葉である。「私はラスコルニコフのいらいらしてゐる心持を読む際、私自身までいらいらした気持になつた（…）。私はこの一篇によつて混乱させられた。ところがこの混乱のまつたゞ中に明るい一つの割れ目ができて、そこから、ソーニヤは今更ら美しく私を鞭撻したのである」。この美しいソーニ

ヤの位置に立つのが朽助、なかんずく朽助の愛情ある言葉なのだろう。朽助は『莊子』齊物論篇の言葉を自分の言葉として肉化し、その肉化された言葉によって「私」を「鞭撻」する。

悪意からどのように脱出するかを模索することが、井伏の昭和4年前後の課題である。昭和4年前後の作品群を見ると、近代知の袋小路を抜け出すためのさまざまな模索があることがわかる。理性の上にあぐらをかいた「私」はさまざまな角度から批判の目にさらされる。知を誇る者に、すべてを自然のはたらきのままにまかせよと、上からの言葉、直線的な言葉を投げかけても力を持たない。＜地下室＞人は、どんな言葉にでも反論（＝言訳）し、逃げ道を作ることができる。井伏流に言えば、愛を欠いた知識人の論理、理性は、「岩屋」に籠もる同類を「鞭撻」する力をもたない。

地下室人もラスコーリニコフも、求める真の答えは自身の内、潜在意識の中にすでにもっている。ただ、その答えが引き出されるためには無意識を発動させる何かが必要なのだ。ドストエフスキイにあっては、その＜何か＞は突き詰めれば、信仰ということになるのだろうが、井伏は＜信仰＞に代わるものを＜純情＞あるいは純情で染め抜かれた＜言葉＞に求めた。

翻って『山椒魚』を見てみよう。すると、蛙は被害者であるばかりではなく、同時に救済者としての役割を担わされていることがわかる。「今でもべつにお前のことをおこつてはゐないんだ」。この言葉の中には、ありえないはずの山椒魚への愛着が感じられる。「今でもべつに」は、時間が愛着を深めたわけではなく、もう相手と出会った頃から、愛着を持っていたことを示す。つまり、ひどい目に遭わされて意地を張ってはいたが、愛着心は消えることはなかったということだ。理解し難いこの蛙の非論理的な言葉（民衆の純情）は、結果的に、悪意を醸成してしまうほどに拗けた山椒魚（驕れる知識人）を鞭撻し、その再生を強く促すことになるだろう。

しかし山椒魚と同じ境遇、あるいはもっとひどい境遇に陥れられながら、蛙はどうしてこんな言葉が吐けたのだろう。その問いかけは、だまされ続けながらも、そのだました当の「私」の行く末を心底案じ続ける朽助（『一匹きの蜜蜂』）や、主人にどんなに「折檻」されても、怒りもせず、自身の

愛着心も失わない男衆エイ（『丹下氏邸』）にも向けられるものであろう。

井伏はどうして、という問いかけに明確には答えない。あるいは蛙が怒らないのは、自分が閉じ込められることにより、同じように閉じ込められた山椒魚の悲しみをともにしたからか。おそらく井伏自身はそのあたりの事情を説明するのを感じなかったのだろう。ただ昭和4年前後の井伏が、意地っ張りで恥じらいをもった民衆、他を愛する能力に長けた民衆の＜言葉＞こそが、屈託し悪意に絡めとられてしまいがちな孤独な知識人を救うのだと、一そう確信するようになったことはたしかである。

注

- 1) 『山椒魚—童話—』と『山椒魚』の違いは字句の訂正にとどまり、本質的な差はない。
- 2) 関良一「山椒魚」（松本武夫編『井伏鱒二『山椒魚』作品論集』クレス出版、2001年、所収）、51頁。
- 3) 東郷克美『井伏鱒二という姿勢』ゆまに書房、2012年、74-75頁。
- 4) 佐藤嗣雄「井伏鱒二の文体」（『井伏鱒二』双文社、1996年、所収）、98頁。
- 5) ゴーシュは猫にも、かつこうにも、「楽長がしたやうに」床をどんと踏んで威す。—詳細は、秦野一宏『宮沢賢治とは何か—子ども・無意識・再生』（朝文社、2014年）、第1章を参照されたい。
- 6) 同上。
- 7) 『井伏鱒二全集』第1巻、筑摩書房、1996年、378頁。以下、井伏のテキストからの引用はすべて同全集（全28巻別巻2）を用いた。
- 8) 「作品手引—宇野浩二氏の作品」（昭和4年）を参照。
- 9) 強調は筆者。以下、断りがなければ、強調は筆者のもの。
- 10) *Достоевский Ф.М.* Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.14. «Наука». Л. 1976. Стр.284.
- 11) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、1966年、41頁。
- 12) 「断片 明治三十八・九年」。—『漱石全集』第13巻、1966年、163頁。
- 13) 『屋根の上のサワン』（昭和4年）にも赤い月が登場する。—「彼が首をさし伸ばしてゐる方角の空には月が一夜更けになつて登る月の慣はしとして、赤くよごれたいびつな月の光が光つてみました」（傍点は原文のまま）。この月も、「私」の「くつつくした思想」と関係するのだろう。
- 14) 涌田佑『井伏鱒二—作家の思想と方法』明治書院、1986年、17頁。
- 15) 秋枝美保「幽閉された生き物たちの意味するもの」（山根巴、横山邦治編『近代文学の形成と展開 継承と展開8』和泉書院、1998年、所収）、192頁。
- 16) 東郷克美『井伏鱒二という姿勢』、71頁。

- 17) 「可也の広さ」は山椒魚 A にとって、精神活動の領域の広さであると同時に、閉じ込められるかもしれないという危機意識を感じさせない広さでもある。意味は一つには収束しない。
- 18) 槇林滉二「山椒魚」(磯貝英夫編『井伏鱒二研究』 溪水社、1984 年、所収)、241 頁。
- 19) 太田三郎「井伏鱒二『山椒魚』評—チェホフ「賭」との関連から」(松本武夫編『井伏鱒二『山椒魚』作品論集』 クレス出版、2001 年、所収)、佐藤嗣雄『井伏鱒二 山椒魚と蛙の世界』 武蔵野書房、1994 年、などを参照。
- 20) サルティコフ＝シチェドリンの『賢いカマツカ』との類似性を指摘する評者もいるが、臆病な知識人を諷したこの物語も、山椒魚 B の＜悪意＞とは無関係である (G. チハルチシビリ、沼野充義訳「陽気な人のための悲しい本—井伏鱒二の作品における「チェーホフ的なもの」—「新潮」、1993 年 9 月号、297-298 頁、を参照)。
- 21) *Достоевский Ф.М.* Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.6. Стр. 419-420.
- 22) ゴーゴリも『友人との往復書簡抜萃』で同じようなことを述べている。ただゴーゴリは「無意味な悪意」ではなく、「純粋な悪意」と表現していた。—*Гоголь Н.В.* Полн. собр. соч. в 14 томах. Т.8. АН СССР. М.:Л., 1952. Стр. 414. 詳細は、秦野一宏「ゴーゴリとドストエフスキ—гордостьの問題をめぐって」(「海上保安大学校 研究報告」法文学系、2010 年 3 月)を参照されたい。
- 23) *Достоевский Ф.М.* Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.6. Стр.321.
- 24) 『井伏鱒二全集』別巻 1、23 頁。
- 25) たとえば『幽閉』には、夜、水に映る蛍たちの放つ光を詩的に描きだした場面。—「蛍達が光つて火の線を引くと、それが水に映つて彼の岩屋の中にまで、極く薄いのでぼろぼろと光つて来るのである。その灯りで見ると (…)」。
- 26) 東郷克美『井伏鱒二という姿勢』、83 頁。
- 27) 1888 年 10 月 27 日付、A. C. スヴォーリン宛のチェーホフ書簡を参照。—*Чехов А.П.* Полное собрание сочинений в 30 томах. Письма.Т. 3. М.,1976. С.46.
- 28) 注 2 を参照。
- 29) このようなシステムとしての＜愛＞の生成は、何より『おとなしい女』で描き出されている。
- 30) 川崎和啓「『山椒魚』の成立と「賭」—昭和六十年版「山椒魚」への道」(松本武夫編『井伏鱒二『山椒魚』作品論集』 クレス出版、2001 年、所収)、224 頁を参照。
- 31) 磯貝英夫は、井伏鱒二が「特別に繊細な神経の所有者」であるがゆえに、「日本の土着の生活者に特有の羞恥心」を感じ取れたのだと指摘している(「井伏文学のリアリズム」(「国文学解釈と鑑賞」、1985 年 4 月号)、28 頁。
- 32) この白い「綿毛の玉」と登場人物たちの純情の関係については、伊藤眞一郎『丹下氏邸』考」(磯貝英夫編『井伏鱒二研究』 所収) に詳しい。
- 33) 『新校本宮澤賢治全集』第 13 巻上・本文篇、13 頁。
- 34) 同上。
- 35) ふつうの人間でも「いざといふ間際に」急に「悪人」に変わる、という『こゝろ』の先生の言葉は、無意識と係わらないわけでない。しかし先生を「悪人」に仕立てあげたのは、どこまでも自身のエゴであって、K への無意識的な悪意ではない。先生は恋のライバルとして K を出し抜くことを考えた時点でもう、罪の意識を感じている。
- 36) 『幻のさゝやき』が『たわむれ』を下敷きにした作品であることについてはすでに、佐藤嗣雄が指摘している(『井伏鱒二 山椒魚と蛙の世界』第 1 部、第 3 章を参照)。